２０２６年（令和８年）２月２１日　土曜日
デーリー東北　２２面　掲載

介護福祉士の養成施設

県内八学短大のみに

介護福祉学科の学生の授業風景（八戸学院大短期大学部提供）

高齢化で介護人材の需要が高まる半面、介護福祉士の取得に必要な知識や技能を学ぶ大学や専門学校などの養成施設は全国的に減少傾向にある。青森県内でも養成施設の募集停止が続き、2026年度は八戸学院大短期大学部介護福祉学科のみとなる。同科の小川あゆみ教授は「学問的な知識や技術を身に付けることで利用者により質の高い介護が提供できる。（養成校の減少は）業界を目指す学生に将来性を示せない」と危機感を募らせる。（松渡拓）

来年度、相次ぐ募集停止受け

将来のサービス提供影響も

介護福祉士は、介護に関わる一定の知識や技能を習得していることを証明できる唯一の国家資格。主な取得は大学や専門学校など養成施設のほか、福祉系高校での修学や、3年以上の経験と実務者研修を経て受験資格を得るルートがある。

県内では、弘前医療福祉大短期大学部の介護福祉科が25年度以降の募集を停止した。介護福祉コースのある青森明の星短大は26年度以降の学生募集を停止し、27年3月にも廃止する。県内の養成施設は八学短大の介護福祉学科が唯一となる。

また、福祉系高校は東奥学園高福祉科（青森市）の1校となっている。

日本介護福祉士養成施設協会（東京）の調査によると、養成施設数と入学者は21年度が327施設、7183人（うち外国人留学生2189人）。25年度が272施設、7356人（同4074人）だった。

養成施設が減る半面、入学者数は増加を示し、一見問題ないように見える。だが、半数以上を外国人留学生が占め、日本語の国家試験が大きな壁となるためか、25年3月の卒業生を対象とした進路調査では受験者数1648人のうち合格者は822人。合格率は50％未満にとどまっている。

八戸市内の介護関係者は「（養成校の減少は）若い人材が入ってこなくなる危機的な状況」と懸念。「現場のリーダーを任される若い介護福祉士が不足すれば、全体の介護レベルが落ちる可能性も考えられる」と指摘する。

小川教授は少子高齢社会の現在、若者と高齢者の多世代間の交流は希薄化していると分析する。「介護業界を目指す若者でも『支援が必要な高齢者』の姿を実際に見たことがなく、イメージが浮かばないという人が増えた」と話す。「個々の状態に合わせた支援を探り、計画的な介護を実践するのが介護福祉士の魅力」とし、人材確保の第一歩として小中学生に向けた情報発信の必要性を訴える。

デーリー東北新聞社提供